

イボンヌ リドリ 英国出身のジャーナリスト

:

明:

タリバン 治 代のアフガニスタンで拘留された元ジャーナリストのイボンヌ リドリ が、イスラ ムとの出会い、そして改宗の についてBBCに ります。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 著名人](#)

より: ハンナ ベイマン

日 02 Jun 2014

集日 02 Jun 2014



もしも、あなたが米国のスパイとしての嫌疑をかけられ、タリバンに拘束されたのなら、ハッピー エンディングを期待することは しいかもしれません。

しかし、ジャーナリストのイボンヌ リドリ にとって、アフガニスタンでの は、彼女の言を借りれば「世界で最も大きく、最良の家族」の宗教への改宗へとつながったのです。

元アルコール中毒 日曜学校の先生は、解放 にクルア ンを み、イスラ ムに改宗しました。

彼女は急 派のアブ ハムザ アル=マスリ について、「本当は可 い人だわ」と述べ、またタリバンは不当な 遇を受けてきたと言います。

2001年、サンデー エクスプレスの 者として いていたリドリ は、パキスタンからアフガニスタンに密入国しました。

しかしジャララバド周 で、彼女はタリバン兵の正面でロバから 落した 、ブルカから禁じられていたカメラをあらわにしてしまい、ジャーナリストであることがばれてしまいました。

その兵士が猛烈に彼女の元に け付けてきた 、彼女はどう思ったのでしょうか？

「まあ、あなた素 ね。」と彼女は に言っています。

「彼はアフガニスタンでは珍しいすごく なる碧眼を持ち、その髭も素晴らしかったの。

「しかし、その すぐに恐怖を感じました。ただ、解放 にパキスタンへ向かう途中でこの男性をもう一度目にし、彼は から私に手を振っていたわ。」

リドリ は をすることも されないまま10日 の拘束を受け、彼女の娘デイジ の9回目の 生日を逃してしまいました。

リドリ はタリバンについてこう ります。「彼らの行 や信条を することは出来ませんが、彼らは不当に 魔化されています。なぜなら善良な人々に爆 を落とすことは出来ないからです。」

46 のリドリ は、人 が犯人に好意を抱いてしまう、ストックホルム症候群の 症が疑われました。

しかし彼女は言います。「私は拘束者たちに して酷いことばかりしていました。彼らに唾を吐き、 をつき、食事を拒みました。私がイスラ ムに 味を持ち始めたのは、解放になってからです。」

“ひらひらの下着”

、リドリ が拘置所の洗濯 で、兵士たちの宿 から える 所に下着を干していたのを取り下げるのを拒んだため、タリバンの外 大臣が呼び出されたほどです。

「彼は言いました。『ほらほら、彼らがそれを目にすると、よからぬ考えを抱いてしまうのですよ』」

「アフガニスタンは世界で最も裕福な国家から爆 を受ける であつたというのに、彼らが心配していたのは、私の大きな、ひらひらの い下着のことだけだつたのです。」

「米国はタリバンを爆 する必要などないことを私は 信しました。女性の を んで 来し、下着をちらつかせるだけで彼らは降参することでしょう。」

リドリ は英国に った 、自らの を理解するため、クルア ンを んでみることにしました。

「私は、自分が んでいたものについて、 愕しました。それは1400年以上に渡り、一字一句たりとも 更されていないのです。」

「
私は、世界で最も大きく、最良の家族に参加したのです。 さえすれば、私たちは完全なのです。」

ダラム カウンティ在住の、彼女のイングランド国教会の は、彼女の新しい家族についてどう ているのでしょうか？

「当初、私の家族と友人の反 は嫌 感に ちたものでしたが、彼らは皆、私が以前よりも幸福で健康、そして たされていることを しています。」

「また、母は私が 酒を止めたことをとても喜んでいます。」

イスラ ムにおける女性の地位について、リドリ はどう考えているのでしょうか？

「ムスリム 国の中には抑 された女性たちもいますが、タインサイドの 路地に行けば、そこにも抑 された女性たちがいます。

「抑は文化的なものであり、イスラミ的なものではありません。クルアーンでは、女性が平等であることが至明にされています。」

また、ムスリムの服装がいかに尊厳を化するものであるかを彼女は述べます。

「胸の大きさや脚のさではなく、知性によってされるということは、いかに解放的であることか。」

3度の婚をした独身の母として、彼女はいかにイスラミが性の心配事から解放してくれたかについて述べます。

「私はもう、男性からのを待つことも、束をすっぽかされることもありません。

「男性のストレスがなくなりました。私は10代以来、初めてボーイフレンドや夫を持つことからのプレッシャーを感じずにむようになったのです。」

しかし、彼女を称する男性のは、最低でも一本はありました。ロンドン北部の宣教、アブハムザアル＝マスリからのものです。

「彼は言ったの。『イボンヌ 妹、イスラミへようこそ。おめでとう。』

「私はまだ最的な言をしていない、と言ったら、彼はこう言いました。『プレッシャーや制されていると感じてはなりませんよ。ここのコミュニティ全体はあなたをサポートしているのですから、もし何か必要であれば、妹の一人にをしてみてください。』

“地へ直行”

「私は思いました。信じられないわ。フィンズバリパクモスクの「火と硫黄」宣教と呼ばれている彼は、本当は可い人だったわ。

「私がを切ろうとすると、彼はこう言ったの。『あなたにえておいてほしいことが一つだけあります。明日、もしあなたが交通事故で死んだのなら、あなたは地へ直行しますよ。』

「私は恐れのため、6月の改宗の まで、信仰 言のコピ を 布に入れていました。」

彼女の新しい人生における最も困 の部分とは何なのでしょう？

「一日五回の礼 だわ。それと、タバコを止めるのも未だに手こずっているの。」²

脚注：

1

者注： イングランド北 部の都市。

2

イボンヌ リドリ ： From captive to convert. BBC News Online. 2004/09/21 (http://news.bbc.co.uk/go/pr/fr/-/2/hi/uk_news/england/3673730.stm)

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/445>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。